

さて、この釜ヶ崎に対する提言は、「労働」ということを中心に、WHO（世界保健機構）が定める健康居住環境の四原則、「利便性」「安全性」「健康性」「快適性」をもとにしてとらえ、ほとんど解決が困難視されている釜ヶ崎の諸問題について、なお可能性を求めて構成したものである。事実、私なりにあいろん地区のシビル・ミニマム（市民生活のための必要最低条件）を、この四原則にもとづいて計ると別表二三〇—二三一ページのような図表がで上がる。

この表の四つの図に示した内側の線は、あいろん地区の市民生活の充足率を数値で示したものであるが、これはあくまでも私の経験、フィーリングで計ったものであるから、必ずしも正確とはいえない。だが、五年近い歳月のなかでおおよその見当をつけて描いたものであるので、かなり近い線にあると思っている。

また、この表を初めてご覧になる方に参考までに申し上げておくが、各図の内側の線が外側の線と一致するか、それに近い状態にあるのが理想的な姿である。しかし、あいろん地区の場合は

「利便性」の場合のみが著しく発達し、「安全性」、「健康性」、「快適性」に関しては、極端といえるまでに劣悪な状態にあることを示唆している。ともあれ、この抜群の「利便性」が、あいろん地区に人口を集中させ、雑踏の魅力、匿名性、秘密性の魅力をつくり上げて、超過密ブロックを形成していったことも見逃せないのである。要はこの抜群の「利便性」に「安全性」「健康性」「快適性」が伴わないまま、無秩序、無計画に、またスプロール化現象を起こしながら、都市化がすすんでいったことにある。この結果、太陽も、緑も、空間もない町が築き上げられたといつてよからう。今後はこの四原則のバランスを取りもどすという立場に立って、改革のメスを加えていかねばならないと考えるのである。

さらに、あいろん地区を改革していく場合、そのコンセプトを自由で、健全な「労働者の町」を構築することであると定めても、それを遂行していくのにそれほど資金を必要としないもの、また多額の資金を必要とするものなどさまざまである。即座に実施に移せるものもあれば、国政レベルで時間をかけて完遂していかねばならないものもあり、それだけ問題が多岐にわたるともに、複雑かつ困難をきわめることも認めざるを得ないのである。しかし、ここで終止符を打つ何らかの対策が開発されない限り、手配師問題、医療問題、暴力問題、売春問題などは抵抗性を強めながら、潜在化しつつさらに解決困難な状態をকাশ出し出していくに違いない。事実、その動

きは静かではあるが顕著に現われはじめている。だが、仮に私の提言をそのまま実施に移すとしても、短期、長期のプログラムを組んで具体化していかねばならず、また巨額の資金を必要なものもあれば、そうでないものもある。

しかし、釜ヶ崎でいまいちばん深刻な問題は何かと問われたとすると、私は二六〇〇人はいるといわれるアルコール中毒患者であると答えた。事実、アルコールは胃や腎臓を悪くするだけでなく、精神までも異状にし、やがては廃人、行路病者としていからである。大阪市ではこれらの人を吹田市山田に設けている「弘済院」という施設に送って、治療を行なっている。しかし、一定の期間、療養すると一応は回復するが、退院して釜ヶ崎に帰ってくると、よほど意思が強固でない限り、再び悪友などにさそわれてアルコールを口にし、一週間もしないうちに再び目がまわり、言語が乱れ、手が震えるという症状を起こしはじめるのである。もう、こうなると路上でも平気で伏し、救い難い状態となる。

こうした患者は釜ヶ崎にくるまでにすでに中毒症状を起こしていた人、釜ヶ崎にきてからコミユニケーションがないため、孤独に耐えかねて酒を飲み、患者となった人もいる。なかには女のアル中患者もいて、そのすさまじい方は見るに忍びがたい場合もある。本田良寛氏が早朝からのアルコール販売だけは、なんとか自粛してほしいといっている真意もここにある。

かつて、私はこのようなアル中患者の無宿氏の葬式を出す手伝いをしたことがあるが、彼は息を引き取る寸前には、口からポンプのように血をはいて、意識不明のまま他界したのである。葬式には一人娘がかけつけてきて出席したのであるが、彼女は、「母は私が一歳のときに結核で亡くなり、それから父は酒ばかり飲んでたようですが、いつのころからか私を捨てて出ていってしまったんです。私はこの父に捨てられてからは伯母の家に預けられ、中学を卒業するとすぐ住み込みで働きに出るなど、大変な苦勞をしました。そして、このころからどこで生きてきたのか、父は金がなくなると私の勤め先にきて、金の無心をいうのです。このために職を変わったこともあり、いつも怒りっぽく、物欲しそうな顔をしている父など、父とは思っていませんでした。しかし、安らかな死顔を見て、これが本当の父だと思っただんです」とポロポロと大粒の涙をこぼしながら、話していたことをいつまでも鮮明に記憶している。

アルコールの恐ろしさ、それがまた釜ヶ崎の人たちにとって、どれほど大きな被害を与えているか、私はこうした人たちとの出会いによって、つくづくと教えられたのであった。

また、最近の問題としては昭和四十八年（一九七三年）十月、西成労働福祉センターの職員が競輪や競馬に狂って、一四〇〇万円におよぶ公金をつまみ食いしたという事件が報道されていた。その日の食事代、宿賃にも事を欠く人たちが多い釜ヶ崎で、こんな大金をムダ使いたというこ

とは、全く許し難い。だが、西成労働福祉センターは大阪府労働部分室としてスタートしたときから、その業務が国家機関の職業安定所に移管することが予定されていて、やがては解散することになっていた。それが、西成労働福祉センターに継承されてからも、その約束は交わされていたのである。そして、その約束の履行は一年延び二年延びして今日に至っているのであるが、そもそもこのようにいつ廃止されるかわからない将来性のない職場で、だれが根性をすえて働く気になるだろうか。事件発生の原因は、実はこの辺にもあったということができるのである。また、西成労働福祉センターの幹部の人たちも、騒動の起こることを労働対策で未然に防ぐために、神経がその方に注がれていて、職員の管理がおろそかになっていたとも考えられる。いずれにしても、西成労働福祉センターはあいりん対策が実を結ばないうちから解散するようなことをせず、ご苦労なことではあるが、自由で明るい労働者街となるまでがんばっていただきたい。おそらく労働者たちの本心も明かせば、そうだと考える。

さらに、当然のことながらますます貧困化する農山漁村、強化される管理社会から流出して行く人たちの受け皿となっている釜ヶ崎が、ここで提案しているような貧しい対策では、根本的な解決はあり得ないだろう。また、例えば大阪市のあいりん対策一つを見てもわかるように、資金的にも相談業務で精いっぱいというところであるから、これからの一〇年間に私が提言している

対策の半分も、実施されることはあり得ないかもしれない。加えて、アル中問題などを解決し、住民のメンタル・ヘルスを回復していくには、一〇年以上の歳月をかけていかねばならないことは、想像に難くないといつてよからう。そして、繰り返しているがどうしても思われる厚い壁に挑戦し、一つ一つ問題をほぐしていくには、単にあいりん地区内における労働・福祉対策を充実していくだけでなく、ここに流れてくる人が多い九州、沖縄、中国、四国などの各県に對しても、県外流出抑制の対策を実施してくれるように、強く要請していかねばならない。また、ブロック内の超過密を少しでも緩和していくために、完全就職の道を開いて脱釜ヶ崎をはかることも、奨励していく必要がある。

なお、ここでは積極的に取り上げていないが、釜ヶ崎というブロックを核として、それをドーナツ状に取りまわっている周辺の町にも、家庭的にはもとより職業的、経済的に不安定な住民が、釜ヶ崎と同様の状態で暮らしており、早急に何らかの労働・福祉対策が不可欠となっている。その対策とは私なりにいうと「準あいりん対策」というようなものである。しかし、釜ヶ崎や山谷のような都市底辺の改革は、住民の自主的、自発的な参加のもとに、まずゴミや臭気との闘いからはじめなければならないのである。

幸い昭和四十八年（一九七三年）秋ごろから、「子どもを守る会」の山崎英雄さんら約三〇人

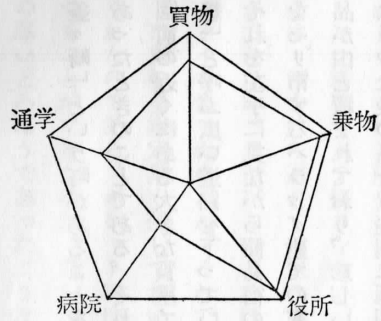
の仲間が、一口一〇〇円でだれでもが加入できる生活協同組合をつくり、愛隣総合センターの一部を借りて牛乳の安売りをはじめた。これはドヤ代や食費の値上がりに対抗して発足したもので、近い将来、リンゴやナシなどの果物を売り、軌道に乗れば食堂や簡易旅館も運営するというビジョンを持っているそうである。こういったみんなの安売りの生活協同組合が発足することは、釜ヶ崎がスラム化して七十余年の間に類例を見なかったことであり、労働者にとっても誠に喜ばしいことである。そして、労働者の連帯感を育成するためにも、それはきわめて意義のある運動と把握してよからう。

しかし、既存の商店は零細であるため脅威となるので、その存在は目の上のコブのように嫌われるであろうし、何かにつけて妨害されることも想像するに難くない。また、この地での生協活動は労働者そのものが貧困であるため利益が伴いにくいので、経済的な面からの障害が運動そのものの発達を大きく阻害することであろう。だが、この生活協同組合はあくまでも労働者の自主的、自発的な発想から生まれたものであって、それは単に牛乳や果物を安売りするだけにとどまらず、釜ヶ崎が新しく生まれ変わるためのエネルギーとなるものである。これからも、このような生活と結びついた地味な運動が、住民の間から盛り上がってくることを、期待してやまないものである。

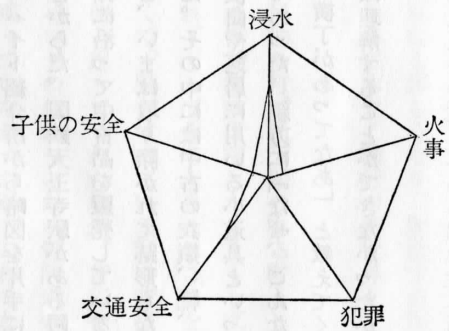
最後に黒田大阪府知事と大島大阪市長のお二人に一言申し上げておきたい。今日までのあいりん対策を熟視していると、それは騒動を切り抜けるというか、未然に防ぐというわくを少しも出していなかったといえる。もちろん、資金的な面からいうとこれで精いっぱいというところかもしれない。しかし少々、乱暴ないい方をするが、ここは芦屋や鎌倉と違い、騒動は起るべくして起きている。今後は労働問題というより石油危機による生産制限、公共投資の削減ということから仕事不足が続く、その結果、騒ぎが起きるといふ社会騒動が勃発する可能性も出てきている。

そのことはそのこととして、一般社会では「人間重視の社会」、「福祉優先の社会」へ向けて方向転換をはかろうという趨勢にあるのだから、これからのあいりん対策は「騒動の未然防止」といった観点から、「人間性の回復、復権」をめざすものに、早急に転換していくべきだろう。それは、日雇労働者のただ食って、飲んで、寝るといふ無味乾燥な生活から脱却させていくのみならず、すさんだ心や孤独の解消といった精神的、内面的なものまでも改革し、充足させていくという、次元の高いものでなくてはならない。そして、この転換が、七〇年代におけるあいりん行の最も大きな変化となるべきだし、また、そういった生活の質を高めるといふ積極的な方向で、現在の対策を再検討し、政府にも協力を求めながら根本的に立て直してほしいと願うのである。

〈利便性〉

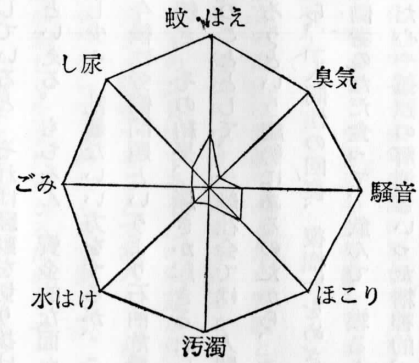


〈安全性〉

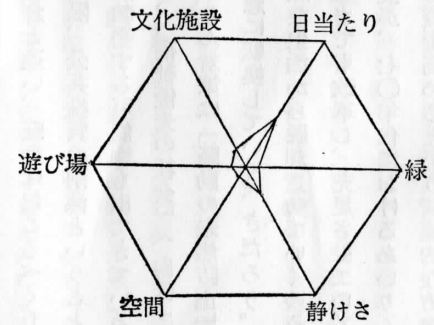


※ 外側の線がシビルミニマムを示す。

〈健康性〉



〈快適性〉



あいりん地区におけるシビルミニマム

大阪に「釜ヶ崎」という町があることを知ったのは、昭和二十八年（一九五三年）の夏、私がまだ学生であったときのことである。それは学生アルバイト紹介所から略図を片手に行った先が、地下鉄動物園前の近くにある大きな質屋であったことからだ。国鉄天王寺駅がある阿倍野橋から「尼崎平野線」と呼ぶ広い道路を下っていくと、道路に沿って中古品を販売している店が軒を連ねており、それを左手に見ながら簡易宿の裏に回ると、いまは取り除かれて跡形もないが、質流れ品ばかりをセリ市するバラック建ての家屋があった。その中には中古の衣類、靴、ふとん、時計といった品が山と積まれており、珍しいものには浪曲や芝居に用いる小道具といったものもあった。仕事はセッた後の品を買主別に区別することであった。親方に「なぜ、こんな浪曲や芝居の道具があるんですか」と尋ねると、「この先に芸人横丁があつてなあ」と教えてくれた。田舎出の私にはここがどんな町であるかは、いっぺんには理解することができなかったが、なんとなくわかったのが、このアルバイトのときからである。

こんなアルバイトを続けているうちに、こんどは四天王寺の近くにある出版社に行くことになった。そこには先輩もいて、比較的居心地もよかったので、つい卒業まぢかまでお世話になってしまった。そうこうしているうちに、釜ヶ崎界隈の地理にも詳しくなり、散髪するなら料金の安い飛田商店街、古着を買うなら動物園前、映画を見るなら三本立て興行の新世界と、きわめて経済的な生活をはじめたのである。

卒業してからも、この界隈へはよく遊びに来た。庶民的な町、通天閣のある町として知られているジャンジャン横丁でドテ焼きを食い、大酒を飲んで簡易宿に投宿したこともしばしばである。あるときなどは、酒を飲み過ぎて部屋のカギをかけ忘れ、どろぼうに入られたことをいままもって忘れることができない。また、このどろぼうがけっさくで、脱ぎすてている私の背広から財布とバンドとネクタイを盗ったのだが、それでは帰りが不便と思ってくれたのか、背広やワイシャツはもとより、市電の全線定期も残しておいて、それにバンドの代わりとなる寝間着のひもを準備しておいてくれたのである。ポケットには一円の金も残っていなかったが、これでなんとか家がたどりつくことができたのだ。盗られておいていうのもおかしい話だが、いまにして思えば、なかなか情の厚いどろぼうであったような気がする。今日、釜ヶ崎には通称「西成強盗」と呼ぶ冷酷で、残忍な犯罪者が出没することがあるが、それはほんの一部であつて、多くの労働者はまじめに働いており、貧しくても温い人情はいまもって脈々と波打っている。

昭和三十六年（一九六一年）八月一日、釜ヶ崎で初めて大きな騒動が起きたとき、私はわざわざそれを見に行つたのである。このとき、霞町交差点付近を境として機動隊と労働者が激突していた光景は、いまだに瞭の奥深く鮮明に残っている。それから八年後の昭和四十四年（一九六九年）春、金井牧師といっしょに来たときは、以前からそれなりになじみがあったというものの、中心部に入るとなんとなく恐ろしかった。しかし、ときたまではあるが、五年間も出入りしているうちに、ここも人の住む町であり、また神が創造されたみ国であるという強い確信を持つに至つたのである。

昭和四十九年（一九七四年）四月からは、日常の仕事の他に、関西大学社会学部で講座を持ったので、釜ヶ崎には本当にたまにしか行けなくなつた。だが、五年にもおよぶ長い歲月、ボランティアとして奉仕した貴重な経験は、何物にも代え難いものがある。ただ、何もよい奉仕ができなかつたことが、悔いとして残っているが、そこで幾人かの親しい信仰の友を探し得たことは、せめてものなぐさめである。また、私たちのボランティア活動になにかと協力くださった方たちに、ここで改めて深く感謝の意を表しておきたい。

なお、本書は冒頭にも記述しておいたように、先輩たちが残してくれた得難い資料に、住民の声なき声を加えて、私なりにまとめ上げたものである。したがって、これは一つの釜ヶ崎史とい

うより、コミュニケーション論をベースとして書いた「釜ヶ崎都市論」といえるものだと思つている。そして、これも釜ヶ崎に対する一つの見方、問題解決の方法として、関係各位の参考に供することができれば、誠に幸いである。加えて、一日も早く「釜ヶ崎を労働者に奉仕する町」として立ち直らせてほしいという願いを込めて書いていることも、汲み取っていただきたいと思つている。

昭和四十九年六月五日

広瀬 久也

368

49.10.15

ひろせ ひさや
広瀬 久也

1932年、兵庫県水上郡春日町中山に生まれる。
1955年、同志社大学法学部政治学科卒業。
1958年、大阪市立大学経済学部聴講修了。
以後、広告会社に勤務しながらコミュニケーション論を研究。
現在、日本基督教団大阪北伝道所会員。関西大学社会学部講師。

地図にない町の歴史——わが愛する釜ヶ崎

1974年 9月10日 初版発行

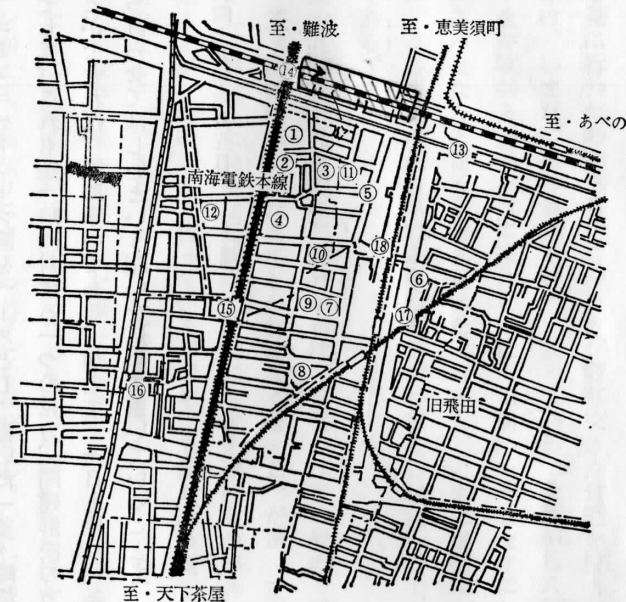
© 広瀬久也 1974

著者 広瀬久也
発行所 日本基督教団出版局
郵便番号160 東京都新宿区戸塚町1の551
振替 東京145610 電話 (202) 0541 (代)

印刷 三秀舎 表紙印刷 伊坂美術印刷 製本 市村製本所

0036-620113-6100(日キ販)

あいりん地区略図



- | | |
|------------------|--------------|
| ① 愛隣センター | ⑩ 甲岸公園(児童公園) |
| ② 市立萩之茶屋住宅 | ⑪ 児童公園建設予定地 |
| ③ あいりん小・中学校建設予定地 | ⑫ 四条ヶ辻公園 |
| ④ 萩之茶屋小学校 | ⑬ 地下鉄・動物園前 |
| ⑤ 旧住吉街道(釜ヶ崎銀座) | ⑭ 国鉄・新今宮駅 |
| ⑥ 愛隣会館 | ⑮ 南海・萩之茶屋駅 |
| ⑦ 西成警察署 | ⑯ 地下鉄・花園町 |
| ⑧ 東萩町公園(三角公園) | ⑰ 阪堺線・今池 |
| ⑨ 海道公園 | ⑱ ションベン横丁 |